

Title	<紹介>小山登久著『平安時代公家日記の国語学的研究』
Author(s)	是澤, 範三
Citation	語文. 1997, 69, p. 43-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68921
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

小山登久著『平安時代公家日記の国語学的研究』

是 澤 範 三

小山登久氏の積年の研究が一冊の大著として上梓された。凡例には次のようにある。

本書は平安時代の主要な公家日記である『貞信公記』『小右記』『権記』『御堂関白記』『左経記』『春記』『水左記』『帥記』『後二条師通記』『殿暦』の十種類の公家日記の文章を表記・文法・語彙・文体の面から国語学的に考察したものである。

記録資料の研究には、その解説方法を提示・実践された、峰岸明氏『平安時代古記録の国語学的研究』(一九八六)の名著があるが、本書も質・量ともにそれに比肩するものである。本書は既発表論文を基礎にしてこれに大幅の増補改訂を加え、体系的なバランスを意識した章立てをとっている。氏の多岐にわたる視点はその目次から

も窺えるところであるが、とりわけ連文や一語多漢字表記の様相を歴史的に押さえる点は、我が国における漢字表記の展開を考える上で重要であり注目される。以下、章を追って簡単に紹介したい。

第一章(表記)の冒頭に置かれた「破格の語序」の考察では、公家日記に見出される破格の例を八つに類型化され、破格の類型による解説法的一端を示される。一方、同じような事柄の表記形式として正格・破格の両形式が混在する点にも検討を加えられ、記録体の恣意的ともみなされる表記の様相が浮き彫りにされる。ついで、公家日記解説に資する辞書としての『色葉字類抄』の利用は小山氏も認められるところではあるが、峰岸氏が提唱された「定訓」の求め方には、「定訓」が一つとは限らない漢字もあることを明示され、その利用に慎重さを求めている。また、表記の問題として公家日記の文章における仮名表記の流れにも注目され、仮名書きの語が当初は儀式に関する会話部に見られたことを指摘される点は、氏が「儀式会話文」と仮称されたように示唆的な内容をもつ。

第二章(文法)では漢文訓読語、仮名文学語、記録語という位相差をふまえ、それぞれの表現形式を比較・検討し、その関係の有無を見出そうとする。国語史の総体から記録体を位置づけようとする著者の意欲が窺えるところであり、教えられるところが多い。

第三章(語彙)では、記録語として「牢籠」の語史と、頭痛がする意味を表す「頭打(かしらがうつ)」など数語について用例を丹念に調査される。とりわけ同義語を接続した表現としての重言は、和語の連接を基底とした表記として解説されており興味深い。

氏の研究は公家日記に中心をおきつつも、記録体の成立の問題も視野に入れ、『万葉集』(題詞・左注)や『古事記』さらには太政官

符にも注目し、奈良時代からの推移を記述される。また、いわゆる正格漢文との対比を重視する見地から、多くの辞書や漢語法研究書などの訓詁にもとづいた堅実な研究でもある。それゆえに第四章（文体）に置かれた本書のまとめといえる「記録体の推移（概略）」は概説としても有益である。

本書に接することにより、著者の問題設定による考察の過程を経て公家日記の文体の具体的な様相が浮き彫りにされ、今後の記録体研究の様々な視座をえることができるであろう。（平成八年五月二十五日発行 おうふう刊 八四〇頁 本体価格三六八九三円）

—— 本学大学院博士後期課程 ——